

令和7年度企画展

昭和の子どもたち

～くらしとあそび～

今年は昭和100年、戦後80年を迎えます。この節目の年に昭和の時代における秦野の子どもたちに焦点を当てて、くらしやあそびを中心に紹介します。



激動の戦前・戦中・戦後をどのように過ごしてきたのか、昭和の時代が歴史となった今、厳しく苦しい日常生活の中でも小さな幸せを見つけながら懸命に生きた子どもたちの様子を写真や資料で振り返ります。

令和7年6月10日(火) ～ 8月17日(日)

【昭和メモ】：「昭和の最初と最後の年は7日間」

- ・ 昭和元(1926)年は、12月25日～31日の7日間であり、昭和64(1989)年も、1月1日～7日の7日間でした。

1. 戦前

大正3(1914)年に勃発した第一次世界大戦で、主戦場となったヨーロッパを中心に民衆が負担を強いられたことの反動により、民主・自由主義的な風潮が広まります。この時期は日本でも民主主義を重んじる「大正デモクラシー」の傾向が強まり、教育界でも、明治時代末からあった児童の自発性や創造性を重視する「新教育活動」が加速し、昭和初期にもこの影響がありました。一方で、この流れを封じる動きも進みます。大戦後の世界的な恐慌、大正12(1923)年の関東大震災による混乱も国家主義的な意識高揚に拍車をかけました。同年11月に大正天皇の名で発せられた「国民精神作興ニ関スル詔書」では、国家興隆は国民精神の剛健にあり、綱紀を肅清し一層の国家の強化をはかると示されます。大正14(1925)年には思想を取り締まる「治安維持法」も成立しました。

そのような情勢の中、昭和2(1927)年、日米関係が険悪になることを憂いた渋沢栄一などの活動により、アメリカから日本へ「Friendship Doll」、日本で「青い目の人形」と呼ばれることになる人形が送られました。日本の子ども達はその礼として、手紙や着物姿の人形を送ります。昭和初期の社会や教育界の相反する潮流の中で、子どもたちは親善の人形を送り合い、交流を行ったのでした。

2. 戦中

昭和6(1931)年に勃発した満州事変を経て、日本は昭和8(1933)年に国際連盟を脱退します。国際的に孤立した日本は次第に戦時の色合いを濃くしていきました。昭和13(1938)年に「国家総動員法」が施行され、国民は「戦時に際し国防目的達成の為、国の全力を最も有効に発揮せしむる様人的及物的資源を統制運用する」総動員体制のもと、生活への統制がさらに強化されます。

軍事物資や輸入品の統制は日用品へと広がり、軍事物資が生活必需品よりも優先され、マッチ・砂

糖・清酒・木炭などが配給となり切符制が実施されました。「拳国一致、尽忠報国、堅思持久」のスローガンが掲げられ、「欲しがりません勝つまでは、ぜいたくは敵だ」などの標語により、精神的な教化運動も行われました。



昭和20(1945)年南国民学校軍事訓練

昭和16(1941)年4月、「皇国の道に^{のつと}則りて」教育を施し「国民の基礎的錬成」を目的とする「国民学校令」により、尋常小学校・尋常高等小学校を合わせて国民学校に変わります。

同年12月1日、「国民勤労報国協力令」が施行され、学校や職場ごとに14歳以上40歳未満の男子、14歳以上25歳未満の未婚女子を対象にした勤労奉仕の義務化が法制化されました。

同月8日、真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争が勃発します。第二次世界大戦の局面の一つで大東亜戦争と呼ばれたこの戦争中の学校は、「空襲にあげ空襲にくれ学業は殆ど作業面に力を注ぎたり」(「沿革史 北小学校」昭和20年度主要事項の記録より)という状況でした。秦野市域は大規模な空襲こそありませんでしたが、多くの戦死者が出ました。

また、戦争が激しくなるにつれ、横浜の子ども達が学童集団疎開により秦野の寺院などへ滞在しました。疎開は子どもを戦禍から逃すために都市部の初等科(現在の小学)3~6年生を対象に行われた政策で、該当の子どもは親と離れ地方で集団生活を行いました。秦野に疎開した当時の子どもや引率教員が戦後に回顧した話には、秦野で過ごした思い出の中に、親と会えない寂しさ、空襲への不安、食料不足のひもじさなども語られています。

3. 戦後（直後）

昭和 20（1945）年の敗戦により日本（東京）に連合軍総司令部（GHQ）が設置され、その基本方針に基づいて軍隊の解散・軍事産業の停止などが指示され、‘国民主権・基本的人権の尊重・平和主義’を三大原則とした日本国憲法が施行されました。

教育の面では修身・日本歴史・地理などの授業は停止（黒塗りの教科書）され教育勅語・御真影などは撤去されます。昭和 22（1947）年の「教育基本法、学校教育法」施行にて軍国主義的国民学校は廃止されて小学校・中学校・高等学校・大学の六・三・三・四制となり義務教育年数も9年間になりました。昭和 26（1951）年に学習指導要領の大幅な改訂があり国語・算数・理科・社会・音楽・図画工作・家庭・体育という教科が示されました。

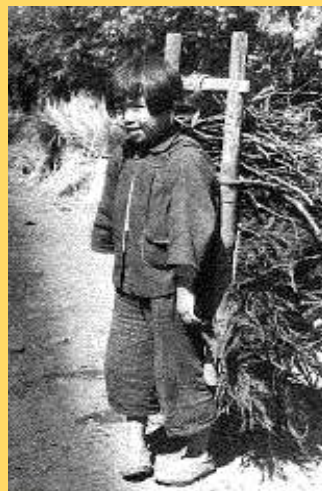


昭和 28（1953）年北中運動会

因みに、戦後直後の昭和 22（1947）年頃より第一次ベビーブームとなり、昭和 24（1949）年に合計特殊出生率は 4.32 となっています。

昭和 25（1950）年に朝鮮戦争が勃発すると、朝鮮半島に近い日本に対してアメリカなど戦争に参加している国より軍事物質の補給や資材の供給などを求められるようになり、敗戦後の厳しかった日本の経済不況は戦前の水準にまで急速に回復することになります。いわゆる「朝鮮特需」です。

しかし、この時期における秦野市域でのくらはしは



たきぎ運び（「秦野の暮らしと民具」より）

子どもたちにとって家のお手伝いは家族の一員として当たり前のことであり、水汲み、廊下の雑巾がけ、庭そうじ、子守り、買い物やお使いなど多くの役割がありました。

4. 戦後（経済成長期）

昭和 25（1950）年頃から昭和 45（1970）年頃までの約20年間、日本経済は急成長を遂げることになります。いわゆる「高度経済成長期」です。「大きい事は良い事だ、消費は美德」などの言葉が流行し、昭和時代のシンボルである東京タワーは昭和 33（1958）年 12 月 23 日に完成します。多くの商品が世の中に出回るようになり、ようやく人々のくらしにも活気が生まれてきました。それを象



徴するのが「三種の神器」といわれた家庭電化製品のテレビ・冷蔵庫・洗濯機です。これらは茶の間に家族団らんをもたらし、主婦たちの家事負担を軽減させました。

昭和 37（1962）年茶の間にて

昭和30年代の学校は戦前からの木造校舎が大半であり、教室の床や廊下は板張りで階段などはすり減っていました。学校において、子どもたちの

楽しみは何と言っても給食でした。みんな大好きな揚げパン、鯨の竜田揚げ、ちくわの磯部揚げ、カレーシチューなどが出る時は大喜びでしたが、脱脂粉乳だけは全く人気がありませんでした。

子どもたちが放課後に集まる楽しい場所といえば近所にある駄菓子屋さんでした。駄菓子屋さんは子どもたちの集いの場所であり、ワンダーランドでした。少しのお小遣いを握りしめ、何を買おうか何を食べようかと真剣に悩みながら目を輝かせていました。人気の駄菓子としては、「梅ジャム、さくら大根、ココアシガレット、パラソルチョコレート、系引きアメ、フィリックスのフーセンガム、クッピーラムネ、モロッコフルーツヨーグル」などであり、オマケ付きの菓子や当てくじなども人気でした。決して物質的



昭和 30 (1955) 年代さくらマーケット

に恵まれていた環境ではありませんでしたが、子どもたちは勉強だけではなく、家のお手伝いもして、みんなと仲良く日が暮れるまで元気にあそんでいました。

人と人との絆や人情味のある近所付き合いは続いていましたが、昭和 43 (1968) 年日本の国民総生産 (GNP) は世界第二位となり、社会人たちは企業戦士とかモーレツ社員とか言われながら、夜間も休日も働いていました。都市部においては、人口が増加することにより大型の総合スーパーやショッピングセンターなどが建てられ、コンビニエンスストアも誕生しました。また、多忙な生活スタイルのニーズに応えるように24時間営業の店舗なども現れてきました。秦野市域も昭和 41 (1966) 年に大秦ショッピングセンターが開店し、昭和 47 (1972) 年には小田急OX、昭和 49 (1974) 年に

は赤札堂と忠実屋が開店しました。また、開業5年で撤退した赤札堂の跡地には昭和 54 (1979) 年にイトーヨーカドーが開店しました。この時期、商業分野では活気がありましたが、農業分野においては長時間労働を避け、より賃金の高い職種への転職や‘近代化’の名の下でコメの減反政策導入などにより農業就業者数は減少し、農村部では過疎化が進むようになりました。

学校での授業は日曜日を除く週6日間だったので、子どもたちは日曜日を心待ちにしていました。しかし、昭和 40 年代より次第に受験戦争が激しくなり、小さい頃より進学塾や学習塾に通って少しでも偏差値の高い学校を目指そうとする子どもたちが増加してきました。大人だけではなく子どもたちにも多忙の波が押し寄せて、自由にみんなと仲良くあそぶ時間はどんどん少なくなっていました。

おわりに

昭和時代の64年間には、混沌とした国内情勢の中、戦争により数多くの国民の命とくらしが犠牲となり、多くの子どもたちが戦禍に巻き込まれることになりました。これは歴史上最も悲しくつらい出来事であり、二度と繰り返してはならないことであります。しかし、残念ながら今も世界で軍事衝突が起こり、嘆き悲しみ苦しんでいる幾多の人たちがいます。子どもたちにも笑顔はありません。

今回の企画展において、改めて昭和時代を振り返ることにより、ご家族で現在、そして今後の未来を考えるキッカケになればと思います。

発行 令和 7 (2025) 年 6 月 10 日
編集 はだの歴史博物館
〒259-1304 秦野市堀山下 380-3
TEL 0463-87-5542
FAX 0463-87-5794